

気配を消して ～自動撮影カメラのメリット～

自動撮影カメラの高性能化、低価格化が進んできたことで、野生動物の調査手法に自動撮影カメラを用いることが多くなっています。これまで野生動物、特に哺乳類の調査には、糞や足跡などの痕跡や電波発信機を用いた調査等が行われてきましたが、自動撮影カメラを用いることで、人間が長期間滞在しづらい、例えば高山帯の様な場所でも、野生動物の生態や行動を把握、解析することができます。また最近では、獣害対策の現場でも加害獣種の判断に使われることがあります。彼らへの影響少なく撮影できるので、餌を求めてウロウロする様子や親の後をついていく幼獣の様子等、生きる姿そのものが映し出されるのが特徴です。

研究所では、自動撮影カメラを活用して、北ア

ルプス山麓を移動するニホンジカの調査を行っています。シカの他にも様々な野生動物が撮影されます。彼らの生きる姿は科学データとして公表されることは少ないですが、多くの表情を見せてくれるのでいつも楽しみにしています。

(軽部 享)



2018年1月10日 研究所敷地内でシカが倒木をまたぐ瞬間を捉えた。目の奥が反射板のような構造をしているため光を浴びると目が光る

長野県初！の氷河 カクネ里

2018年1月18日。大町市役所において牛越大町市長と「カクネ里雪溪（氷河）学術調査団」の小坂団長（信州大名誉教授）らによる記者会見が開かれました。その場で、北アルプス鹿島槍ヶ岳（2889m）北東斜面にある「カクネ里雪溪」（長野県大町市）が、氷河であることが学術的に確認されたと発表されました。ご記憶の方も多いのではないかと思います。

「カクネ里雪溪（氷河）学術調査団」は2014年に、市立大町山岳博物館、信州大学、立山カルデラ砂防博物館と当研究所の4者で結成され、主にカクネ里雪溪が氷河であるか否かを明らかにするための研究を行いました。カクネ里雪溪はアプローチが非常に厳しく調査は思うように進みませんでした。調査によって氷河の条件である雪溪の内部に厚い氷体があること、それが固体のままで流動していることが確認されたのです。この調査結果が学術論文（参考文献）に掲載されたことにより、

初めて氷河と認定されました。このとき、カクネ里雪溪の他に2つの雪溪も同時に認定され、これにより国内の現存氷河は6つとなりました。

参考文献

福井幸太郎・飯田 肇・小坂共栄（2018）
飛騨山脈で新たに見出された現存氷河とその特性。
地理学評論, 91, 43-61

(富樫 均・浜田 崇)



中遠見山から撮影した鹿島槍ヶ岳のカクネ里氷河。国立環境研究所と共同してカクネ里氷河の変化をモニタリング中。